

第 9 章

パイオニア女性に学ぶ

大学生向け女性アーカイブセンター所蔵資料を活用した学習プログラム

森 未知

1 学習プログラム開発の経緯

NWEC が行ってきた女性アーカイブに関する調査研究

国立女性教育会館（以下、NWEC）は2008年6月、女性アーカイブセンターを開設した。女性アーカイブセンターは、男女共同参画社会の形成に顕著な業績を残した女性、全国的な女性団体や、女性教育・男女共同参画施策等に関する、非刊行の史・資料（以下、資料）を収集する。そして収集した資料は、整理・保存するとともに広く活用し、関係機関との連携・協力を図り、男女共同参画の推進に関する啓発、学習・研究支援等を行っている。

NWEC では、女性アーカイブセンター開設に先立ち、2005～2006年度「女性アーカイブセンター機能に関する調査研究」を実施し、女性アーカイブセンターの機能、収集・整理・保存・提供に関する方針・方法等を明らかにした。その後、2007～2009年度には、科学研究費補助金により「女性アーカイブの構築とその活用に関する実践的研究」を行った。本研究により、「女性デジタルアーカイブシステム」、「全国女性アーカイブ所在情報データベース」を構築・公開し、受入資料の「奥むめおコレクション」に関する研究と、その活用のための学習プログラム、並びに女性アーカイブを構築する実務者を対象とした研修プログラムを開発した。

Ⅲ プログラム開発

奥むめお（1895～1997）は、戦前・戦中・戦後を通して暮らしに根づいた女性運動を展開したが、その資料を、男女共同参画社会の実現に向けた社会的プロセスの視点、キャリア形成・リーダー形成の視点という2つの視点に基づき、分析と評価を行った。そしてこの研究から、社会活動キャリアの事例として奥むめおを取り上げ、「男女共同参画意識をもち、歴史的・社会的な視点に立って個人のキャリアを形成すること」を目的とした、学生対象のプログラムを開発したのである。

本稿は、この学生対象のプログラム開発と、開発したプログラムを、2009年度、川村学園女子大学の学生を対象に、実験的に実施した結果について報告する。本プログラムは、本号で報告している2010年度の埼玉大学、埼玉県私立短期大学協会との連携授業のプロトタイプともなったものである。

学生対象のプログラムの開発

プログラム開発に関わったメンバーは以下のとおりである（肩書は2008年度当時）。

上村千賀子（NWEC 客員研究員）

齋藤慶子（川村学園女子大学非常勤講師）

渋谷晴子（お茶の水女子大学大学院博士後期課程）

江川和子（NWEC 情報課長）

森 未知（NWEC 情報課専門職員）

西村昭子（NWEC 情報課専門職員）

対象を大学生としたのは、NWEC の研修は、女性教育（婦人教育、主に成人女性対象）の流れをくみ、またリーダー層を対象としているため、どうしても年齢層が高くなりがちであるが、ナショナルセンターとして、地域的・年齢的に幅広い層の参加が得られるよう工夫が求められていることによる。

上村氏、齋藤氏、渋谷氏はNWECに寄託された奥むめおコレクションの研究に携わる研究者である。まず、奥の長い生涯から、大学生が自分のキャリア形成を考えるために、どの資料がどのように使えるかを検討した。規模

としては、導入的なプログラムとして1泊2日、参加型のグループワークを行うために参加者は30名程度と考えた。また、NWECが今まで行ってきたキャリア形成関係のプログラムから、基本的構成要素である男女共同参画意識の涵養、実態把握のために男女共同参画統計を学ぶという要素を取り入れることとした。また同様にNWECが開発したキャリア形成事例の分析に用いるワークシートを、奥のキャリアの節目に合わせて作成した。

作成したプログラム全体の見取り図、プログラム・デザインは、第1図のとおりである。

2 実験プログラムの実施

実施の経緯

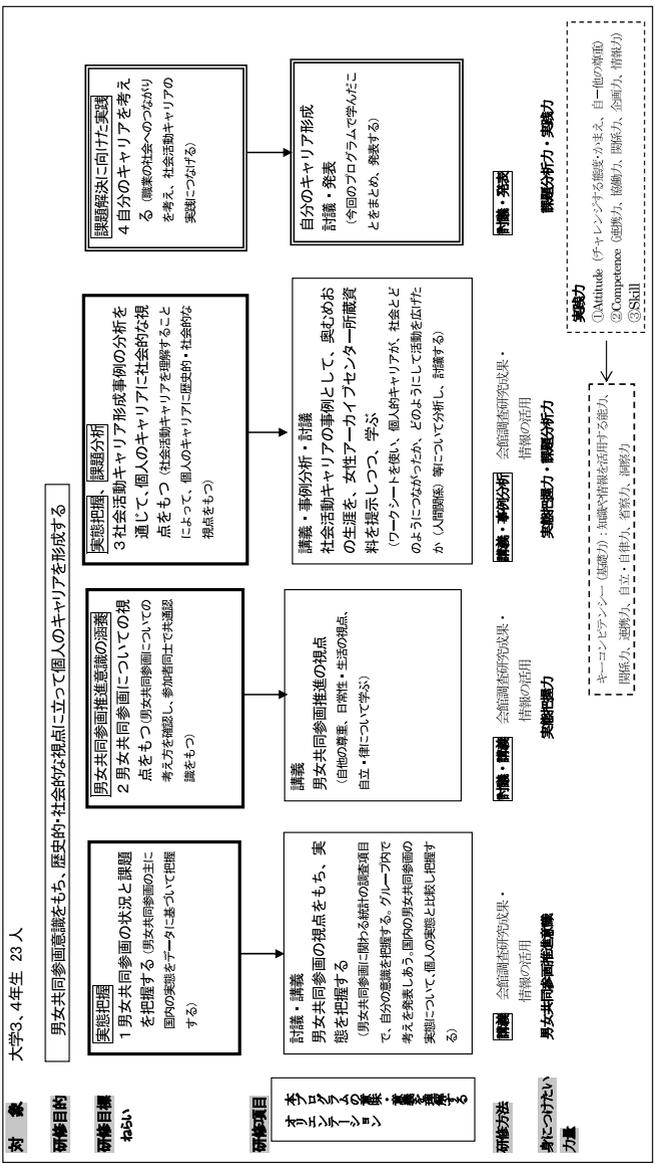
開発したプログラムは、2009年3月に開催した女性アーカイブ構築委員会で報告し、大学に所属する委員から再来年度に実施を検討したいとの意見があった。その後、プログラム開発に携わった齋藤慶子氏の母、齋藤幸子氏（川村学園女子大学教授）より、就職セミナーの一環として3、4年生を対象に実施の依頼があり、NWECとしては実験プログラムと位置づけて、2009年9月に開催することとなった。参加したのは日本文化学科の齋藤幸子氏と、国際英語学科手塚裕子氏のゼミ生、計19名（申込時は23名。4年生6名、3年生13名）である。

日程表

プログラム・デザインを内容、時間配分等、実際行う形にしたものが日程表である（第1表）。座席の配置はグループごととした。グループ分けは教員に依頼し、学年・学科が混じるように4～5名の4つに分けた。

第1図 プログラム・デザイン
川村学園女子大学「キャリアセミナー in NMEC」
～私のキャリアを考える～これから社会に出るあなたへ～ プログラム・デザイン

- 【本プログラムの特徴】
- ① 会館の女性アーカイブセンター資料、及び女性アーカイブに関する調査研究成果を主眼とする。
 - ② 社会活動キャリアの先達として、女性アーカイブセンターに資料のある異文化をおおきく取り上げ、個人のキャリアに社会的視点をもたせる。
 - ③ 学生を対象とする。



第1表 川村学園女子大学・キャリアセミナー in NWEC

「私のキャリアを考える～これから社会に出るあなたへ」

日程（1泊2日）9月11日（金）～12日（土）

場所：国立女性教育会館研修棟 208研修室

【1日目】9月11日（金）

	13:00-13:15 (15分)	プログラムオリエンテーション NWEC 情報課専門職員 森 未知
1	13:15-14:15 (1時間)	討議・講義「男女共同参画の視点を持ち、実態を把握する」 講師 NWEC 情報課専門職員 森 未知
	14:15-14:30	休憩
2	14:30-15:10 (40分)	講義「男女共同参画推進の視点」 講師 NWEC 理事長 神田道子
	15:10-15:15	休憩
3	15:15-16:45 (1時間30分)	講義「歴史的・社会的な視点に立って個人のキャリアを考える—女性アーカイブセンター奥むめおコレクションに学ぶ」 講師 NWEC 客員研究員 上村千賀子
	16:55-17:25 (30分)	女性アーカイブセンター、女性教育情報センターの見学 NWEC 情報課
	18:00-	夕食

【2日目】9月12日（土）

4	9:00-11:30	討議・まとめ「自分のキャリアを考える」
---	------------	---------------------

実施内容

○事前指導

8月初旬、学生に奥むめおの女性アーカイブセンター所蔵展示ファクトシート（資料解説、A4両面8枚）を送り、読んで興味・関心のあった点についてレポートをまとめるという課題を課した。これは奥の長い人生すべてを、当日の短時間の講義では行えないためその部分は学んできてもらうことと、セミナーに向けて準備し関心を高めることを意図したものである。

さらに直前の9月8日、大学でオリエンテーションを行い、齋藤慶子氏が『日経ウーマン』『CLASSY』等の女性雑誌を教材に、現在の結婚と結婚後の働き方、さらに戦前の女性教員に関して書かれた論文から、100年前にも仕事と家庭の両立を求める動きがあったことを知らせる講義を行った。

Ⅲ プログラム開発

○当日

1日目は初めのグループ内での自己紹介以外は講義形式であるため、2日目の討議につなげるためにも、講義の最後の10分は、印象に残ったことをワークシートに記入する時間にあてた。

実施内容の概要は以下のとおりである。

(1) 討議・講義「男女共同参画の視点を持ち、実態を把握する」

導入部分としてワークシートを使い、まず自分の今までのキャリアを振り返り記入し、それをもとにグループごとに自己紹介をした（ワークシート記入15分、自己紹介10分）。

<ワークシート項目>

- ・今までのキャリアを振り返る（部活、サークル活動、アルバイト、ボランティア、それにあてはまらない社会活動の経験と、そこで得たこと）。
- ・今つきたいと思っている職業と目指したきっかけ
- ・今、自分のライフコースをどのように考えているか。

- ①専業主婦コース（結婚し子どもを持ち、結婚あるいは出産の機会に退職し、その後は仕事を持たない） 1名
- ②再就職コース（結婚し子どもを持つが、結婚あるいは出産の機会にいったん退職し、子育て後に再び仕事を持つ） 6名
- ③両立コース（結婚し子どもを持つが、仕事も一生続ける） 11名
- ④DINKSコース（結婚するが子どもは持たず、仕事を一生続ける） 0名
- ⑤非婚就業コース（結婚せず、仕事を一生続ける） 1名

ここから『男女共同参画統計データブック2009』を使い、希望するライフコース（男女の差）、結婚（結婚件数、離婚件数、晩婚化）、賃金格差、寿命、65歳以上の単身女性の率、M字型就労（国際比較）、国際的に見た日本の女性の地位ランキング（GEM）等のデータについて、クイズ形式で考えるワークショップを行った。学生には1人1冊、研修貸出用のデータブックを配布し、1問ずつ該当ページを示して解説した。賃金格差については、データブックには掲載がなかった生涯獲得賃金についても資料を配布した。

(2)講義「男女共同参画意識の醸成、男女共同参画の視点」

「男女共同参画」という言葉は1990年代中頃から使われ、1999年の男女共同参画社会基本法で広まった。1975年の国際婦人年を契機に、女性はすでにある社会に参加する「社会参加」を目標としてきたが、「社会参画」とは方向・方針をつくるところまで関わることであり、これが「男女共同参画」の画期的なところである。

戦前の女性は、選挙権もなく、大学に行くこと、職業に就くことも難しかった。現代までに一歩ずつ女性たちが進めてきたことが、少しずつ実現していき、現在、社会システムの基盤がようやくできあがってきたところで、これから社会に出る皆さんは重要な任務を負っている。

戦後「個の尊重」が言われたが、男女共同参画のためには「自他の尊重」が必要。依存からの独立である「自立」、自己決定である「自律」と、生活基盤が結びついていなければ男女共同参画は成立しない。

「日常性、生活の視点」「関係の視点」「プロセスの視点」といった、5つの視点を持つことが男女共同参画を進めるために必要。

また、キャリアとは仕事だけでなく、自分の生き方全体がキャリアとなる。個人のキャリアが歴史の流れの中にあり、次の世代へとつながっていく。過去から未来への大きな流れの中で、自分の生き方を見つめていくことが大切である。

(3)講義「歴史的・社会的な視点に立って個人のキャリアを考える—女性アーカイブセンター奥むめおコレクションに学ぶ」

奥の長い人生のうち、今回は、現在にも通じる食の偽装に対する運動など主婦連による消費者運動を行い、参議院議員となった、戦後の活動に焦点をあてた。

社会活動キャリアのきっかけ・転機、キャリア形成の困難、困難の乗り越え方、仲間・ネットワーク・連携づくり、受けた支援、個人への影響、社会への影響といった項目で、この時期の奥のキャリア分析を行ったワークシートを元に講義を行い、困難の乗り越え方と受けた支援の部分は空白にして、

Ⅲ プログラム開発

聞き取って記入してもらった。

使用した女性アーカイブセンター資料は、主婦大会決議(案)、主婦の歌、「たのしい闘い(主婦連たより1号)」、主婦の店選定関連資料、幟、主婦の夏期大学ポスター、主婦手帖、物価値上げ反対デモ写真、おしゃもじ等である(パワーポイントを使って見せ、その後の見学で現物を見せた)。

(4) 討議・まとめ「自分のキャリアを考える」

前日の3つの講義について、1つを15分グループ討議、10分討議内容の発表、最後に上村氏がまとめのコメントをした。発表は全員ができるように、教員が順番を割り振った。

グループ討議は一通り感想を話した後、とぎれてしまうグループもあったが、教員がファシリテーターの役割を担うことにより、討議が活性化した。

最後にワークシートに、2日間を振り返って学んだこと、自分の今後のキャリアについて考えたことを記入して、セミナーを終了した。

3 ワークシートより

各講義について、印象に残った点、感想は以下のようなものがあった。

(1) 討議・講義「男女共同参画の視点を持ち、実態を把握する」

- ・男性・女性間での格差(所得・就業率・平均寿命など)が見られる。結婚しても、決して安定するわけではなく、女性の選択する／したライフコースによって、家計に変化が見られたり、子どもの有無によっても事情は様々に変化する。特に、女性の平均寿命が大きく伸びている今日、女性は今まで以上にその生き方について考えなければならなくなっているのかもしれないと感じた。
- ・日本の女性の弱さ(?)を目の当たりにしたように思えました。様々なデータを見て、自分もいつかそうなるのかと思うと不安になります。不安を取り除ける様に色々学んでいきたいです。戦前の女性の学業ができない、職業に就けないということが、今も尾を引いて、男女の収入等に差があるの

かと思った。(メモ) 所得。寿命等からも男女の差が見られた。女性の地位の低さ。日本の国会。女性の少なさ。意識(女性が政界にいるのは珍しい)を変えないといけない。

- ・ 1 教育までは男女の差はそれほどなさそうなのに、社会的立場は低い。
- 2 大学進学率が男女共にそれほど高くない。 3 現実の厳しさ、国際水準と日本を比べて、はるかに劣る日本。どうするかが今後の課題。 4 男女の収入の差。生涯賃金の両立コースと再就職コースの差。 5 社会進出は多くない。 6 環境はまだ整ってない。 7 再就職は難しいし、損失率も上がる。

(2)講義「男女共同参画意識の醸成、男女共同参画の視点」

- ・ キャリアとは、仕事のことと思われがちだが、社会をつくるキャリアが生きていくうえで大切だと思った。男女共同参画社会基本法がたった10年前のことだなんて、ショックでした。自分たちがもっと小さいときや生まれる前からなのかと思っていました。また、個人ではなく社会のつながりの中で、個人がみんな意識することが大切だと思いました。女性だけでなく、男性も、性別ではなく、個人をそれぞれ皆が！私たちが意識をして、動かなければ、その法律なんて空っぽであることを聞き、たいへんと思いました。誰かのつくった社会に行く、居るのではなく、私たちが私たちの生きる社会を作ることが必要だと強く感じました。たまに、有名人がそんなことを言っていて「カッコイイなあ」と見ていたことが、自分自身の問題なのだとはっきり感じさせられました。
- ・ ①社会参加と参画の話が印象に残った。思えば、誰か他人の作った社会で生きるなら「誰か」の基準で生きているということになる。②その例が、戦前の女性たちの選挙ができない、大学にいけない、「個」がないという状況なのだろうと思う。そこから自立と自律を得るためには、参加から参画に移らなければならないという話に納得した。③しかし、誰かの作った社会の中なら、その「誰か」の価値基準常識を基盤に構成されているはずである。④そのような逆風の中で、男女共同参画の理念に自力でたどり着

Ⅲ プログラム開発

いた人々に興味を覚えた。

- ・現代までに一歩ずつ女性たちが進めてきたことが、少しずつ実現していき、1999年、男女共同参画社会基本法が制定し、社会システムの基盤がようやくできあがったところで、これから社会に出る私たちは重要な任務を背負っていることを知ることができた。「自他の尊重」のために、良好な人間関係を築くことが大切とおっしゃっていましたが、私も同感だと思いました。
- (3) 講義「歴史的・社会的な視点に立って個人のキャリアを考える—女性アーカイブセンター奥むめおコレクションに学ぶ」
 - ・奥むめおさんが、ここまでやってこれたのは、奥さんのポジティブな考え方や、良好な人間関係を築き、強い信念を持って行動に移してきたこと。また、奥さんのことを慕う多くの仲間たちが支援してくれたことが大きかったのではないかと思います。【グループ内討議でのまとめ】・奥さんの人柄の良さ、強い信念と行動力、主婦の心をつかむアイデアがこのような偉大な功績を残した。・女性目線の意見が多かったので、当時、また現代においての男性目線の意見をもっと知りたかった。
 - ・主婦業が無償労働である限り、男女平等にはならない。・お互いマナーを守り、お互いを尊重。情けは人のためならず。・奥むめおさんの様にポジティブな気持ち。・しっかりとした学習(マナー)・周囲をよく見る。・現代では人を信用していない(現代の環境と奥たちの時代のちがひ)。・人との関わり合い・地域活動(近所づきあい)・日ごろの行い。・政治でも一般の人が参加しやすい←工夫がよくできている。・個だけで終わるのではなく、様々な人に広めていく=自他の尊重、男女ともに。

4 成果と課題

終了後アンケートは、とても参考になった13名(68%)、参考になった6名(32%)と高い評価を得た。2日目の発表や、提出されたワークシートか

ら、奥のように行動した女性たちが、現在の男女共同参画社会の基盤づくりとなってきたこと、そして自分のキャリア形成が、これから男女共同参画社会をつくる社会参画につながることなど、意図したことは十分に伝わったと思われる。

課題としては、1日目に講義、2日目に討議というプログラムよりも、講義と討議をセットとしたほうが、討議が深められたのではないかということ、及び討議になれていない場合のファシリテーターの役割について配慮すべきであったことが挙げられる。

参考文献

- 上村千賀子・齋藤慶子・渋谷晴子 2008「資料解題：奥むめおコレクション－暮らしに根づいた女性運動の軌跡」『国立女性教育会館研究ジャーナル』第12号：38-40
- 国立女性教育会館 [編] 2009『連携・協働を推進しつつ、地域づくりに参画する人材が育つために（女性関連施設に関する調査研究報告書 平成20年度）』

(もり・みち 国立女性教育会館情報課専門職員)